

本書（講談社現代新書 277 頁 本体 1300 円 2009 年 3 月刊）のことは、私の平日日課＝市営プール通いで知り合った友人＝A さんから教わった。A さんは、76 歳の私より年上だが、小説を書こうとして文学教室に通い、20 種近い出版社の書評誌を購読したりで、青年的知的好奇心を持ちつつ生きている人だ。この A さんが講談社『本』4 月号掲載の著者自身による本書の紹介「迷走する日米同盟」をコピー、「政府・自民党の連中が日米同盟とか言っているのは日米安保のこととばかり思っていたのがちがっていた」と添書きして、FAX で送ってくれたのである。この添書きは、以下のマスコミ、ミニコミの記事の含意と照応する。

1) 『東京』08 年 12 月 18 日神奈川版の藤浪・樋口両記者署名入り記事「キャンプ座間 米陸軍前方司令部あす一周年」でのワーシンスキー司令官の言：<米陸軍の最優先の任務はイラクとアフガンでの対テロ戦争><（陸自との連携については）同じ任務を遂行することになる>。

2) 『全国革新懇ニュース』308 号 09 年 4 月でのインタビュー記事＝益川俊英「戦争なくて済む努力は絶対にある」：<安保条約は日本でおこった戦争に対してアメリカがどうするか…という法律です。アメリカが戦争を始めたとき、日本が軍隊をもっていつて助けるといふ条項はありません。だから「日米同盟」はいまの段階では使ってはいけない言葉ではないか>

3) 『新婦人えびな』3 号 09 年 4 月でのビキニデー参加者報告<アメリカのやることには、とにかく黙って耐える、理不尽に抵抗しない日本政府。今までは日本を守ってくれたでしょうが、今後は守ってくれないことをいろいろなニュースで私は聞いています>

—このような状況認識の基礎にある状況そのものの変化を、歴史構造的に描いたのが本書である。著者は、国際情報局長、イラン大使、ハーヴァード大国際問題研究所研究員などを歴任した外務省幹部官僚で、02 年から防衛大学校教授を務め、今年 09 年 03 月に退官となった（43 年生まれなので定年退官？）人物。退官寸前ではあるが「日米安全保障体制の新たな枠組み」は「自衛隊員に死を覚悟して貰うこと」だと批判的に述べる（7 頁）書物を出版したわけだ。

父ブッシュの行なった湾岸戦争＝第 1 次イラク戦争（91 年）に日本が 135 億ドルの支援を行ったのに、クエートやアメリカから感謝されなかったのが<今度は金だけでなく血による国際貢献を>と吸血鬼的に考え主張するのが日本の支配者の思想になり政策実践になっているなかで、このような書物の出版の意義は大きい。防衛庁政務次官、郵政大臣を歴任した箕輪登が、イラク派兵違憲訴訟を提起したのを頂点として、防衛庁の要職にあった者が反戦平和の立場に立って発言することは従来いく例かあったが、著者孫崎がそうなるかどうか、期待をもって見守りたい。

孫崎は、1) 在日米軍基地、2) 日本は西側陣営、3) ただし攻撃能力は持たない、という日米安保の基本が 80 年代「シーレーン構想」で「歴史的な大転換」を遂げたと説く（43 頁）。けれど、多くの日本人は中東＝日本の石油輸送海路確保のために対潜哨戒機 P-3C を保有すると理解するが、実は 1000 カイリのシーレーンは、「欧州におけるソ連の攻勢に地球規模で対応するためオホーツク海のソ連の潜水艦を攻撃する」というアメリカの戦略で構想されたものだから。日米両政府間の文書「日米同盟：未来のための変革と再編」（05 年 10 月）は、両国の同盟は「世界における課題に効果的に対処するうえで重要な役割を果たしている」と遂に宣言する。安保条約の極東条項ははるかに超えられ、オバマのアフガン等での対テロ戦争継続への自衛隊の動員という枠組みが形成された。これこそが「日米同盟の正体」だと孫崎は論ずるのだ。ただ、在日米軍基地なしではアメリカのベトナム戦争は行なえなかったことへの言及はなく、日米安保の本質を対米従属としたりしなかったり（6, 46 頁）の議論に私は異を立てる。しかし、ソマリア海賊退治と称して厚木基地から P-3C が飛び立つのを極右街宣車 10 台が激励する現状を批判するのに有益な書として強く推したい。（09 年 6 月 10 日）